

アルツハイマー型認知症への進展予測における Mini-Mental State Examination の有用性

金井 光康¹⁾ 島崎 裕子¹⁾ 森田 詠子¹⁾ 大崎 充子¹⁾ 木村 紘平¹⁾
美原 盤¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 認知症疾患医療センター

[目的] アルツハイマー型認知症 (AD) へ進行する際の早期変化について、Mini-Mental State Examination (MMSE) の有用性を検討した。

[方法] 2018 年 1 月から 2019 年 12 月に当院を受診、正常ないし軽度認知障害と診断、10 か月後に再受診した 46 例を対象とした。MMSE 下位項目は、時間の見当識、場所の見当識、即時記憶、計算、遅延再生、呼称、復唱、口頭指示、文章指示、自発書字、図形描画からなっており、因子構造として、単純な記憶に対する課題 (即時記憶、呼称、復唱、文章指示)、見当識に関する課題 (時間の見当識、場所の見当識、遅延再生)、自発的思考を要する課題 (計算、口頭指示、自発書字、図形描画) の 3 因子について評価した。

[成績] 37 例が認知症へ移行していた。認知症の背景疾患は、AD が 30 例、血管性認知症が 3 例、レヴィー小体病が 2 例、前頭側頭型認知症が 1 例、1 例が慢性硬膜下血腫を合併した。AD へ進展した進展群 (30 例) と認知症へ移行しなかった維持群 (9 例) について検討した。因子構造では見当識課題で有意差を認め、下位項目で時間の見当識が、維持群 (5.0) に比し悪化群 (4.2 ± 0.7) で有意に低下していた ($p < 0.05$)。総点数は進展群で 24.7 ± 2.7 から 22.2 ± 3.2 に低下した ($p < 0.05$) が、維持群は 26.7 ± 1.5 が 27.3 ± 2.2 と明らかな変動はみられなかった。進展群の因子構造でみられた変化は、見当識に関する課題と自発的思考を要する課題で低下、下位項目では時間の見当識、計算、遅延再生で有意な低下であった。

[結論] 認知症への進行予測として、計算や遅延再生の障害も着目されているが、AD に進展した症例においては時間の見当識が有意な変化を示した。場所の見当識障害に比し、日時の把握が困難となることの顕在化が、AD 早期にみられる変容であることが示唆された。日時の見当識障害をみた場合、AD への進展が懸念され、食事や運動等の生活習慣のコントロールや社会的活動の維持など、発症予防に対する介入が望まれる。